

与野党が真正面からぶつかるねじれ国会では、事態打開の「次の一手」を求めて、逆に双方の歩み寄りの動きも生んでいる。超党派による勉強会の発足などが相次ぐ中、自民、民主両党の中堅・若手

衆院議員7人は先月、審議の活性化、円滑化に関する提言を発表。国会改革の一つの在り方として注目された。提言のまとめに携わった民主党の細野豪志氏に、意図するところを聞いた。(白鳥龍也)

自・民の若手で国会改革提言

議員は官僚化脱し議論を

民主党も自民党も大きな組織になって、国会議員自身が、構想力とか判断力を求められる機

会が非常に少なくなっている。逆説的な話ですが、道路特定財源の仕組みの大本は、当時三十

代半ばだった田中角栄元首相らが議員立法によりつくった。いまのわれわれ若手にそれだけの

力があるかとなると、はなはだ心もとない。政策立案は官僚に

頼り、賛否は党の決定に従うだけ。政治のダイナミズムが、議員の官僚化によって失われている。それを打ち壊さないと、日

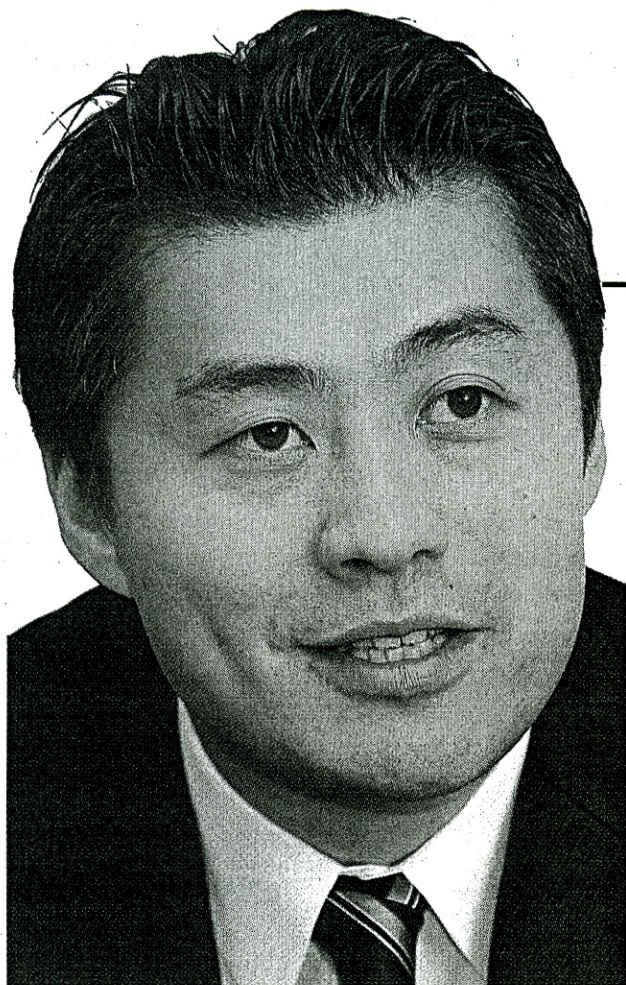
本は政治家がリードしていく体制にならない。

提言に至った危機感をストリートに語る。では、それを打開するための処方せんとは

まず、政党による法案の事前承認ルールをなくすこと。特に、与野側は法案の国会提出前に態度を決めてしまい、審議を形骸(けいがい)化させている。また、政府提出法案の審議

いま 会いたい

細野豪志 民主党衆院議員



安江実撮影

ほその・ごうし 滋賀県出身。京都大卒。三和総合研究所研究員として、主に経済・通商政策の立案に携わった後、2000年衆院選の旧静岡7区に民主党公認で出馬し初当選。党国対副委員長、静岡県連代表、役員室長など歴任。党内では、前原誠司元代表に近い立場で活動している。静岡5区。3期目。36歳。

が優先され、議員立法が後回しにされている問題。最後に、党議拘束。全法案にかけるのではなく、場合によって緩やかにする。この三つが特に重要。こうすれば、政治家のそれぞれの考えが、国会論戦を通していまよりずっと明確になってくる。

「自民党議員と提言をまとめた訳は」
提言は、実はついぶん前から考えていたんです。ただ、現実には、国会の慣例という壁はほとんど動かない状況で、発表はなかなか難しいと思っていた。そうした中、たまたまねじれ国会になり、民主党内でも自民党内でも、国会の在り方についてこれではいかんという話が出てきた。それで、自民党の河野太郎さん、水野賢一さんと話をしたら、偶然にも同じ意見だと分かり、昨秋以降、議論を重ねて今回の形になりました。